東京大学大学院　新領域創成科学研究科　環境学専攻　助教授・博士（工学）
清家　剛

ボフィールのアブラクサス

みなさん「未来世紀ブラジル」という映画をご存じだろうか。これは1986年に公開されたテリー・ギリアム監督の近未来を描いた作品である。時代は20世紀、徹底した管理社会が実現しており、全ての人間はコンピュータ上で管理された状態にあるという設定。情報省のあるミスから無実のバトルという人物が、タトルと間違われて逮捕されるところから話が始まる。主人公のサムはそれをきっかけに、事件に巻き込まれていく。この映画を見たときに、ジョージ・オーエルの「1984」という小説のストーリーや設定と似ていると感じたが、何よりその表現が興味深かった。現実としての近未来ではコンピュータでデータが管理されているのに、タイプライターが使われ、あらゆる場面で紙の書類が重要視されている。夢の中では日本の鎧甲をかぶった大男に襲われるなど、その描写、表現のディテールが大変おもしろいものであった。

さて、この近未来世界の設定に登場するのが、リカルド・ボフィールのアブラクサスという集合住宅なのである。ボフィールは、フランスにおけるいくつかの集合住宅でプレキャストコンクリートを石のような表現に用いた素晴らしい作品を多数つくった建築家であり、これはその代表作である。

アブラクサスは、1985年に低所得者層向けに造られたものだが、プレキャストコンクリートにカラフルな色が使われ、石像の宮殿のような表現と大型ブロック造のような力強さで有名になった建築である。この建物が、近未来の現実社会の主人公の住まい、間違われて殺されたバトルの住まい、また夢の中の葬祭場として、使われているのである。つまり、現実の建物であるにもかかわらず、そのまま近未来のロケ地として使われているのだ。

現在はCG全盛の時代であり、特撮による未来社会の表現の迫力にはすばらしいものが多く、この映画の表現は時代遅れの陳腐なところはあると思うが、その描き出そうとする近未来世界のデザインが非常に優れているので、今見ても十分面白い。

私はいままでなぜかこの建物に行く機会に恵まれなかったのだが、2003年9月にやっと建設後18年を経た作品を訪問することができた。これまでに数多くの方がここを訪れており、パリ郊外の東向きに高速鉄道MRTに乗って「マル・ヌラ・バレという駅で降りて徒歩圏にある」と昔から聞かされていた私は、十分な確認もせずにパリのレ・アル駅でチケットを買って、マル・ヌラ・バレ駅に向かった。そこで、ボフィールと、もう一つ有名なプレキャストコンクリートの集合住宅のピカソアリーナを見ることができると聞いていた。

さて、電車に乗って、どうせ終点の駅だからと思い、安心して居眠りをしつつマル・ヌラ・バレ駅

Brazil

清家　剛　TSUYOSHI SEIKE
東京大学大学院　新領域創成科学研究科
環境学専攻　助教授・博士（工学）
1964年　徳島生まれ
1987年　東京大学工学部建築学科卒業
好きな輸入ビール（ベルギーを除く）：コロナ（メキシコ）、ギネス（イギリス）

に到着。しかしそこで降りてみると、どうも様子がおかしい。たしか郊外住宅地だと聞いていたのに、駅前の商店などが全くない、というか、そこにはユーロ・ディズニーランドしかなかったのである。駅名を確かめると、小さな字でユーロ・ディズニーランド公園と書いてあった。しばし途方に暮れた私は、そこで間違ってもユーロ・ディズニーランドに入場することはなく、気を取り直して少し知恵を絞った。そこで得た結論は、この電車は18年も経ったため、路線が延長されて、もとはマル・ヌラ・バレ駅だったところが途中駅の別の駅になったのではということに思い至った。そこであわてて持ってきた少ない資料を見て、だいたいあたりを付けて、あとは駅に近づいたら目を凝らして廻りを見てみようということで、パリ方面に帰っていった。

お目当ての駅が近づいて、一生懸命周りを見回していたら、ちらりとピカソアリーナらしき建物が見えた。「やった、あたり！」、ということでノワジー・グランという駅で降りて、まずは発見したピカソアリーナへ向かった。

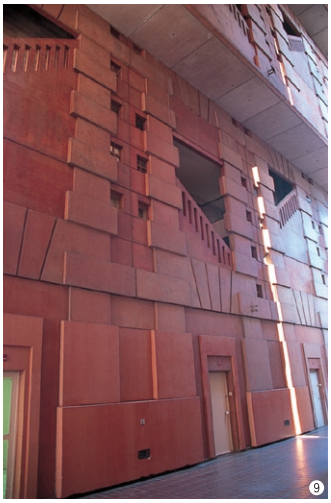
ボフィールのアブラクサスと同時期に建てられたこの建物は、同じく低所得者層向けのプレキャストコンクリートの集合住宅である。マノロ・N・ヤノフスキーの設計によるこの建物は生物的な曲線と、円が印象的であり、形状の自由度の高いプレキャストコンクリートの実力を十分発揮した作品だといえる。（写真❶～❸）年月のためいささか汚れは目立つようになったが、その形は、今でも力強い。

さて、ピカソアリーナをあとにして駅に向かってうろうろと歩くこと30分、目的のアブラクサスをやっと発見した。駅のすぐ近くだが、駅ビルに遮られてなかなか発見できなかったのである。

いよいよ念願のアブラクサスとの対面となった。これは3つの建物で構成されているプロジェクトである。それぞれ半円形の「劇場」、この字型平面の「宮殿」、中央の「アーチ」と呼ばれており、その荘厳な表現は、プレキャストコンクリートが石の代わりに、あるいは石以上に力強い表現を実現できていると感じた。中庭に面する外観は圧巻である。（写真❹～❼）一方で映画でたびたび登場する内部の廊下の吹き抜けは、大きな石で囲まれたような表現が印象的で、別世界のように見える。（写真❽～❾）なるほど、近未来映画の舞台に使いたいと思うのも得心がいく。

アブラクサスとピカソアリーナというプレキャストコンクリートの名作を堪能した私は、満腹になって無事パリに戻った。でも、本当に住んでいる人はどう感じているんだろうという疑問は残った、それについては、実物のボフィールの作品が登場する「友達の恋人」（1987年、エリック・ロメール監督）という映画をご覧いただくといい。ここではパリから見てマル・ヌラ・バレと反対の北西の郊外にあるセルジ・ポントワースという町にあるグリーン・クレセントという集合住宅が登場する。（写真❿～⓬）映画は、この町に住む若者の2組のカップルが、仕事や恋に悩みながら暮らしている日々を描写しており、パリの郊外住宅の生活がよく分かる。4人のうちの一人がボフィールの集合住宅に住んでおり、内観が登場するだけでなく生活の実態がよく分かるので、おもしろいですよ。

アブラクサスではたくさんの子供たちが中庭でサッカーをしていた。こうした環境で育った子供たちが新しい感覚を持って次の世代を形成すれば、さらにおもしろいデザインの建物がまた出来そうな感じがしました。建築のイメージが映画やSFのイメージを造っていくのにどれほど貢献するかは未知数だけど、将来楽しみですね。



写真❶　ピカソアリーナ外観
写真❷　ピカソアリーナの中庭側
写真❸　アブラクサス外観
写真❹　アブラクサス外観　劇場
写真❺　アブラクサス外観　劇場
写真❻　アブラクサス外観　アーチ
写真❼　アブラクサス外観　遠景（左：劇場／右：宮殿）
写真❽　アブラクサスの宮殿の廊下
写真❾　アブラクサスの宮殿の廊下
写真❿　セルジポントワースの集合住宅
写真⓫　セルジポントワースの集合住宅
写真⓬　セルジポントワースの集合住宅